

まえがき

セーヌ川といえば、私たちにとってはロマンチックな郷愁を感じさせますが、温暖化の進行による環境破壊の影響で増水でパリ市民を恐怖に落とすような事態となることが、近年しばしば起きています。自由の都パリも厳しい私権の制限下でコロナ禍が続き、その艱難は日本にも伝わっています。そのような中にも将来を見すえた日仏協力の文化財保護活動が続いています。その事業に献身的に関わっておられる古賀さんのパリ通信です。今月もル・コルビュジエ船「ルイズ・カトリーヌ号」の現況が伝わっています。（小原靖夫記）パリ通信はパリ在住の古賀順子さんからの月報です。今のパリの風を感じます。

COVID-19 セーヌ川増水

2月10日(水)パリは雪景色の一日だった。突然に降りてきたシベリア寒気団で今朝はマイナス4度。昼間もマイナス気温のままだ。明日はさらに気温が下がる予報で、今週はモスクワ並みの寒さが続く。フランスも異常気象が顕著になり、極端な自然災害が頻繁に起こるようになってきた。

1月22/23日夜からセーヌ川が冬の増水期に入った。パリ市内の通常水位は2-3mだが、冬の雨、上流の雨、雪解け水などが流れ込んでくる。パリを含め、1月のフランス北部と西部の降雨量は記録的で、シャラント＝マリティーム県では30年振りの大雨で町全体が水に浸かる被害が出ている。

ル・コルビュジエ船「ルイズ・カトリーヌ号」が係留されているパリ・オステルリッツ橋がパリ市内のセーヌ川水位測量点であ



背景はパリ・オステルリッツ駅です。

2024年パリ・オリンピックに向けて大改修中です。増水のセーヌ川 鳥たちの不安な様子が感じられます。

る。岸には高低差があり、水が溢れてくる場所は異なる。船の前の広場も傾斜があり、水量、速度で被害の出方もさまざまではあるが、4mを超えると岸に水が上がり始める。10月浮上したばかりの船に今季最初の増水警戒が出た。水位は徐々に上がり、2月7日(日)4,57mのピークに達し、三日間は横這い状態、今日ようやく下がり始めた。長雨で地面は飽和状態、今週末までは大雨は予想されておらず、ゆっくりと引いていく見込みだ。

セーヌ川増水は毎年のことで4mを超えることも稀ではないが、増水の準備を怠ると大惨事になりかねない。3年前の今日2月10日「ルイズ・カトリーヌ号」が沈んだ。最高水位5,88mだった。その教訓を忘れてはならない。船の係留ケーブル、ロープ、岸と船の間



の緩衝浮き、チューブに異常はないか、船が岸やメトロ高架に近づき過ぎてはいないか、下流に付けている7隻のボートハウスにぶつかる危険はないか、危険な漂流物はないかなど毎日監視を続けている。

ボートハウスは優雅な生活と
思っていたが、結構大変だ。

「ルイズ・カトリーヌ号」は
コンクリート船だが、後方の船

は金属製だ。今日のようにマイナス4度になると配管は凍り水が出ない。セーヌ川に浮いている鉄板船だから真底冷える。水位が高いので栈橋をよじ登らなければならない。甲板は凍りついてツルツル滑る。室内の食べ物も凍る・・・など危険なことも多い。毎年11月から4月末までをセーヌ川増水期とし、岸には何も置けない厳しい規制があることにも納得した。

幸いにも今回は5mを超えることがなくホッとしている。4mを超えると大型船は橋の下を航行できなくなり、大きな波はなく静かだが、水位が上がれば船も上がる。いつもは船だと気が付かない位だが、高く浮かんだ船は感動的である。

この時期にたくさん写真を撮って、修復工事の支援金集めに役立てたいと思っている。

浮上はしたものの修復・復元の道のりはまだまだ遠い。コンクリートの状態、鉄骨の痛み具合など、3月ようやく船の調査が終わり、今後の方針を決めるが資金不足は目に

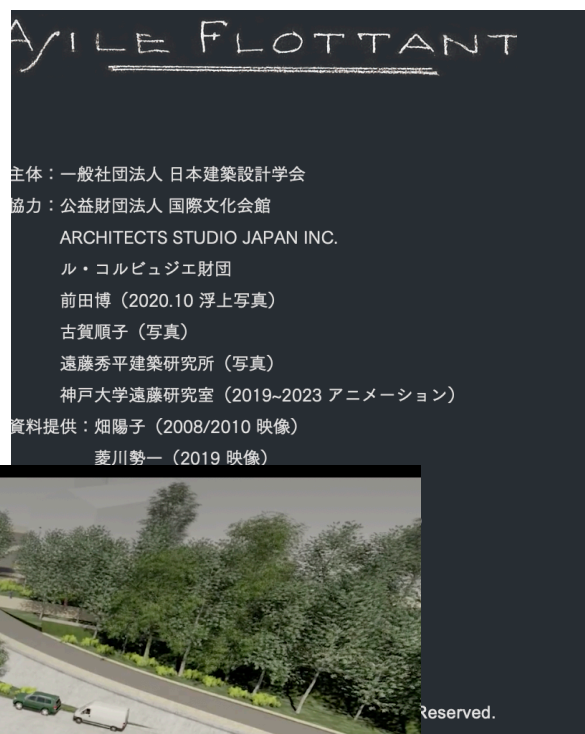


見えている。フランスの文化財という点ではパリ・ノートルダム大聖堂と同じだ。百年を経た船を後世に残そうと支援してくれる人たちがいることを願って、今できることを続けていくしかない。

「アジール・フロタン(ルイーズ・カトリーヌ号)修復プロジェクト」はコロナ禍とともに進んでいる。日々の新規感染者数は2万を超え、死者も8万人になろうかというフランスだが、3回目の都市封鎖をせずに持ち堪えようとしている。少ない数字ではあるが、今日の時点でワクチン接種が200万人を超えた。ワクチンの期待は大きく、その効果も確かだが、乗り越えなければならない障害はまだ続く。船の修復も然りで、時間との闘い、資金集めなど乗り越えなければならないことが続く。2023年秋のオープンを目指に少しずつ進むのみである。

「アジール・フロタン修復プロジェクト」の近況は以下のURLをご覧ください。
<http://www.asileflottant.net>

完成の姿



アジール・フロタン(ルイーズ・カトリーヌ号)修復関連記事はパリ通信41号、54号、65号74号、80号、89号、95号、106号、108号を御覧ください。ベストピア第387号

「小さな橋をたくさん架けよう」にも関連記事があります。建築設計に興味のある方、文化財保護に興味のある方のご参加をお勧めします。（文責・小原靖夫）